

山梨県南アルプス市  
Yutaka Shougakkou

## 豊小学校遺跡(第Ⅱ地点)

豊小学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008. 3

南アルプス市教育委員会

山梨県南アルプス市  
Yutaka Shougakkou

## 豊小学校遺跡(第Ⅱ地点)

豊小学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008. 3

南アルプス市教育委員会

## 例 言

1. 本品は「南アルプス市立豊小学校屋内運動場（仮）」の建設に伴い、南アルプス市教育委員会が実施した山梨県南アルプス市吉田 787 における豊小学校跡地の発掘調査報告書である。
2. 南アルプス市教育委員会が実施した豊小学校遺跡の調査事業費は原因者である市の負担による。ただし、同建設事業がまちづくり交付金対象事業であるため、調査にも同交付金が充当されている。
3. 発掘調査は平成 18 年 6 月 5 日～7 月 27 日に実施され、整理作業および報告書の作成は平成 19 年 2 月より 3 月、同 5 月～平成 20 年 2 月まで行った。
4. 調査は南アルプス市教育委員会が主体となって行い、保阪太一（南アルプス市教育委員会）が担当した。
5. 本書作成における図面、図版作成者は以下の方々が従事した（整理作業の参加者は第 1 章に示す通り）。  
加藤由利子、久保田幸恵、古郡明
6. 本書の執筆・編集・写真撮影は保阪が行った。
7. 測量業務、航空写真撮影業務、上器実測・デジタルトレース業務は株式会社シン技術コンサルに委託した。
8. 発掘調査及び報告書作成において下記の諸氏から多人なるご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。  
石神孝了・斎藤秀樹・田中大輔・千葉博俊・保坂和博
9. 本報告書に関する出土品及び記録図面、写真等は南アルプス市教育委員会に保管している。

## 凡 例

1. 造構図版中の水系レベルは海拔高を示し、単位はmである。
2. 造構図版中のスクリーントーン及びドットの説明は図中に示してある。
3. 方位は全て世界測地系に基づく座標北である。
4. 遺物番号は本文・挿図・表で全て一致する。
5. 本書で使用した地図は、1:25,000 地形図「小笠原」（国土地理院）、1:10,000「南アルプス市地形図」（南アルプス市）である。
6. 断面図で示す斜線は造構確認面および地山を表している。また▲は遺物検出位置を表す。
7. 遺物測定表において括弧で示した計測値は推定値を示す。
8. 本書で用いた土器編年期は原則的に「山梨県史 資料編2」を踏襲した。

## 目 次

### 例文・凡例

|                      |    |
|----------------------|----|
| 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過       | 1  |
| 第1節 調査に至る経緯          | 1  |
| 第2節 調査の経過と体制         | 1  |
| 第Ⅱ章 豊小学校遺跡の概観        | 2  |
| 第1節 遺跡の位置            | 2  |
| 第2節 地理的環境            | 3  |
| 第3節 歴史的環境            | 3  |
| 第4節 既往の調査            | 5  |
| 第Ⅲ章 調査の方法            | 7  |
| 第1節 試掘調査と調査区の設定      | 7  |
| 第2節 調査方法と層序          | 7  |
| 第Ⅳ章 検出された遺構と遺物       | 10 |
| 第1節 住居址              | 10 |
| 第2節 土坑・溝状遺構・遺物集中区    | 13 |
| 第3節 遺構外出土遺物          | 18 |
| 第Ⅴ章 総括               | 25 |
| 第1節 調査成果の概要          | 25 |
| 第2節 豊小学校遺跡をとりまく集落の様相 | 25 |

## 挿図目次

|   |    |
|---|----|
| 第1図 遺跡の位置 (1/50000)                         | 2  |
| 第2図 南アルプス市遺跡分布図                             | 4  |
| 第3図 道路毎の地形及び調査地点の分布 (1/3000)                | 6  |
| 第4図 豊小学校遺跡周辺地図<br>(第1地点・第2地点) (1/800)       | 8  |
| 第5図 豊小学校遺跡(第2地点) 遺構位置及び基本十幅<br>(1/300・1/60) | 9  |
| 第6図 1号住居址 (1/60・1/15・1/3)                   | 11 |
| 第7図 2号住居址 (1) (1/60・1/30)                   | 12 |
| 第8図 2号住居址 (2) (1/3)                         | 13 |
| 第9図 1号溝状遺構 (1/60)                           | 14 |
| 第10図 2号溝状遺構 (1/30)                          | 15 |
| 第11図 1号 (1)・3・4・5・6号溝状遺構 (1/60・1/3)         | 17 |
| 第12図 遺物集中区 (1) (1/40)                       | 19 |
| 第13図 遺物集中区 (2) (1/3)                        | 20 |
| 第14図 遺物集中区 (3) (1/3)                        | 21 |
| 第15図 溝状出土遺物 (1区・2区) (1/3)                   | 22 |
| 第16図 溝状外出土遺物 (3区・4区) (1/3)                  | 23 |
| 第17図 遺構東西の遺構分布図 (1/3000)                    | 27 |

## 写真図版目次

|                             |   |
|-----------------------------|---|
| 図版1 調査区全貌                   | 調査区周辺の概観 (北より) 調査区 (北より)  |
| 図版2 1号住居址                   | 1号住居址全貌 (西より) 上部出土状況<br>1号住居址全貌 (北東より)  |
| 図版3 2号住居址                   | 2号住居址全貌 (南東より)<br>2号住居址全貌 (北西より) 上部出土状況 住址<br>2号溝状遺構・土坑 3号～6号溝状遺構・1号土坑 (南西より) |
| 図版4 溝状遺構・土坑                 | 5号溝状遺構出土遺物 (東より)<br>3号～6号溝状遺構・1号土坑 (北より)<br>1号土坑 (南より)<br>3号・4号・5号溝状遺構 (北西より) |
| 図版5 溝状遺構・遺物集中区・基本十幅         | 遺物集中区遺址出土状況 (北東より)<br>2号溝状遺構 (東西より)<br>第2基本十幅断面                               |
| 図版6 豊小学校6年生数学授業用作業用紙        | 調査区周辺の概観 (南東より)   |
| 図版7 住居址・溝状遺構・遺物集中区出土器       | 1号住居址・2号住居址 5号溝状遺構<br>遺物集中区   |
| 図版8 遺物集中区・遺構外出土十幅 遺物集中区 遺構外 |   |

## 表日次

|                 |    |
|-----------------|----|
| 第1表 豊小学校遺跡出土器類表 | 24 |
|-----------------|----|

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

南アルプス市立豊小学校の屋内運動場は昭和52年に建設されており改築の必要に迫られていた。また、昨今の安心・安全のまちづくりが求められている中、地域の防災拠点としての役割を担うべく早急に建設に取り掛かる方針が打ち出された。当該地域は文化財保護法にいうところの「掛知の埋蔵文化財包蔵地」である豊小学校遺跡として認識されているため、平成18年1月10日付で南アルプス市長より文化財保護法第94条に基づく通知が提出され、同19日付で山梨県教育委員会へと進出した。周囲における調査実績から遺跡が遺存することは必至と考えられ、工事主体者である南アルプス市教育委員会教育総務課と協議を重ね、平成18年度中に新屋内運動場で卒業式を举行すべく非常にタイトなスケジュールを縛っての試掘調査の実施、さらには円滑な本調査への移行などを想定し埋蔵文化財を取り扱うことを確認した。既存建物の解体工事が終盤を迎えた平成18年6月2日から6日（実働2日）にかけ、工事計画地内に4箇所の試掘構を設定して試掘調査を実施し、遺物集中箇所を検出した。また、先の工事によって掘削された地中梁の周囲のみにしか搅乱を受けていないことが確認され、今回の建設計画によって遺跡の一部が破壊され現地保存できないことが判明し、記録保存を目的とした調査へと切り替え、翌6月7日より発掘調査を開始した。

### 第2節 調査の経過と体制

#### 発掘調査の経過

試掘調査に引き続き平成18年6月7日より記録保存を目的とした調査に切り替え、重機を用いて調査区内の表土剥ぎを開始した。既存建物建設時に設置された地中梁や独立基礎を解体撤去すると遺存する遺構を傷めてしまうため、地中梁等を撤去せずに残し、梁の周囲の搅乱部分のみを掘り下げる作業を繰り返し、21日までかけて表土剥ぎを行った。12日より本格的に作業員を加えた体制で手作業により搅乱除去、包含層の掘り下げ、遺構確認を開始した。調査区西側の1区より順に遺構確認を進め、随時溝状遺構、住居址などの遺構の掘削を行った。23日には屋内運動場の完成を待ちわびる豊小学校6年生により歴史の授業の一環として遺跡の体験発掘を実施した。このほか調査期間中には地元獅子吼の小学校3校が現地見学を行っている。雨天の日が多く思うように進まない中梅雨の晴れ間を利用して7月22日航空写真撮影を実施した。この時までに予定されていた調査区はほぼ調査を終了していたが、最後に検出した住居址の大部分が調査区外へと伸びていたため撮影後調査区を住居址1軒分拡張し表土剥削を開始した。同時に24日からすでに終了していた1区2区を引き渡し基礎の解体撤去工事が判明した。またもや雨に泣かされ、解体工事にも追われたが26日には全ての調査を終え、予定された工程通り27日には現地から完全に撤収した。現地は基礎部分の解体撤去作業に入るため発作上の埋め戻しは行わず現場を引き渡している。

#### 整理調査の経過

整理調査および作業は、調査担当者の他の業務との兼ね合いにより現地調査終了直後ではなく翌平成19年2月より開始し平成20年2月まで行った。報告書刊行を目的とし、遺物洗浄、注記、接合、復元、写真整理、実測遺物の選定、遺物実測、遺物観察表の作成、実測図のデジタルトレース、遺構図面の整理、各種図面の作成、遺物の写真撮影などの順で作業を進めた。

現地調査および整理調査参加者（業務の委託については別途参照のこと）  
飯室めぐみ、加藤山利子、片岡久子、神田久美子、久保山幸恵、小林素子、酒井さつき、桜井理恵、新津かつみ、廣瀬源春、古郡明、穂坂美佐子、山路宏美

## 第Ⅱ章 豊小学校遺跡の概観

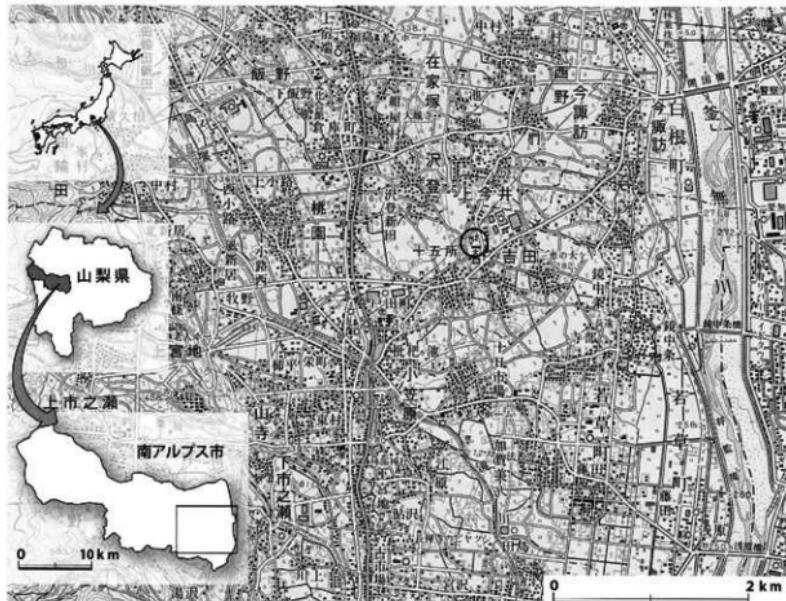
### 第1節 遺跡の位置

豊小学校遺跡は山梨県南アルプス市の東部吉田字西原に位置し、御動使川によって形成された扇状地の扇端部に程近い微高地上に所在する（第1図）。

甲府盆地の西縁、南流する金無川の西方一帯は古くから岐地域と呼ばれており、豊小学校遺跡のある櫛形地区豊地域は、昭和35年まで豊村として栄えてきた地域である。の中でも吉田は御動使川扇状地の扇端部近くに広がる地域であり、その立地から古より「原方」と呼ばれている。当地周辺は昔から畑作・養蚕が盛んな地域であり、かつてはこの地周辺にも桑園が広がっていたがその後養蚕業は減る一方となり、それに伴って桑園は桃やすもも、さくらんぼを中心とする果樹畠へと変化し現在へと至っている。

豊地域は古くから算学や寺子屋、私塾など、教育に対して積極的に取り組んだ地域といえる。明治5年、十五所の法源寺を仮校舎として吉田学校が開かれ、明治9年には現在と同じ地へ豊小学校が新設されたのである。小学校には調訪神社が隣接し、さらにこの周辺には各種公共施設や金融機関、農協などが集中し豊地域の中心的な地域といえる。

なお、昭和34年、豊小学校の校舎の改築の際に「地表から約一メートル位下、（中略）底の裏側に木葉の押紋がある土器の底部と、他に数箇の笠痕の土器片が出土した。」（農村1960）とあり、またその周辺の畠でも土器片を採集できることなどから遺跡の存在が認識され、後に「豊小学校遺跡」として周知されることとなる。



第1図 遺跡の位置 (1/50,000)

## 第2節 地理的環境

豊小学校遺跡は先述した通り釜無川右岸の御動使川扇状地の扇端部に程近く微高地に立地する（第2図）。

周辺の地形を概観すると、日本を東西に二分する大構造、フォッサマグナの西縁を限る糸魚川・静岡構造線が南北に走り甲府盆地の西端を画している。断層は幾重にも発達し、地形の変換点を成しながら市域を縦走している。その最大の特長が国内第二位の高峰「北岳」を擁する南アルプス連峰（赤石山脈）であり、その前衛である櫛形山に代表される巨摩山地など南アルプス市域西部は急峻な山々に囲まれた山岳地帯となる。

市域東部はこれら急峻な山々から流下してきた河川によって形成された複合扇状地から成る。特に巨摩山地のドノヤカ峠東麓より流れる急流の御動使川によって遊び出された土砂は、東西7 km以上、南北10 kmを測る全周でも有数の広大な御動使川扇状地を形成した。南アルプス市の扇状地に南北にメスを入れた形となった近年の発掘調査の増加により、流路を小す砂礫層の堆積状況などから現在の御動使川以前の流路の変遷ならびに本流としていたであろう時期が推定され、御動使川以前はさらに南を東流し概ね南から北への流路の変遷過程が想定されている。これらの扇状地の扇尖部にあたる桃園・小笠原・十五所などは、古来「原七郷」と呼ばれ「原七郷は月夜でも焼ける」といわれるほど極めて地下水位が低い乾燥地帯であり、また、豪雨時などには洪水に襲われるなど水田経営に向かない土地として知られ、古来地元では「原方」と呼ばれている。

御動使川扇状地の南方には櫛形山から流下する大和川・深井川が合流して形成される滝沢川や、漆川、市之瀬川など幾筋もの河川によって形成された小扇状地が重なり合う複合扇状地形を成している。

一方、滲みこんだ水は扇端部で再び湧き出し、若草町の鍋川条・牛市市場・甲斐町の江原・駄沢等と弧状に湧泉列を成す。水が豊富なこの一帯は古くから「田方」と呼ばれる。市域の東部は南流する釜無川によって画され、巨摩山地由來の複合扇状地の扇端部を侵食するように市域東部には釜無川の氾濫源が広がっている。また、櫛形山の東麓には市之瀬台地があり、台地から扇頂部にかけての掛輪山・上宮地・平岡・上市之瀬などは山の根にあることから「根方」と呼ばれ、谷川の水を利用した水田や畑に利用されてきた。

以上のように凡そ南アルプス市域の地形を概観し、急峻な山々に囲まれた地域特有の地形が形成されていることが確認された。そのような中で豊小学校遺跡は御動使川扇状地の扇端部に程近く、南東方向へ緩やかに傾斜する微高地に立地し、標高約297 mを測る。御動使川の流路変遷の推定から、豊小学校遺跡のすぐ北側には上今井から下今井の辺りを通る治路が流下していたとされ、その時期は繩文時代後期から弥生時代中期にかけてとみられている。当該地域に分布する遺跡の調査成果からは、長い作月中で形成され続ける扇状地形の姿を垣間見ることができる。

## 第3節 歴史的環境

本遺跡を含めた御動使川扇状地の扇端部地帯は弧状に並ぶ湧水ポイントに沿って周知の埋蔵文化財包蔵地が集中する。これら扇端部周辺には繩文時代後期以前の遺跡は無く、弥生時代から古代に集中する（第2図）。

南アルプス市域での遺跡の古地図は、山麓部や市之瀬台地周辺を中心に旧石器時代、繩文時代の遺跡があり、円錐形土偶などが重要な文化財に指定された鉄物師匠遺跡（1）はこの台地麓の扇状地扇頂部に立地している。統いて繩文時代の晚期ごろから徐々に扇状地へもその分布を見せ始め、弥生時代から古墳時代にかけては、八ヶ丘遺跡（2）や長田口遺跡（3）など市之瀬台地周辺地域とともに台地から離れた扇状地上ならびに扇端部周辺の湧水帯により開拓された微高地周辺へ大きく広がりを見ることができ、台地上からの進出という稱作の開始と連動した遺跡の分布を読み取ることができる。これら扇状地や沖積低地の遺跡の存在を世に知らすこととなったのは1980年代から始まった南アルプス市域の低地部を横断する中部横断道の建設計画からとなる。

中部横断道やそのアクセス道路の計画に伴い、滝沢川扇状地周辺地域では向河原遺跡（4）で弥生時代中期の水田跡が、大師東丹保遺跡（5）で後期の水田跡が、また、溝呂木道上遺跡（6）、中川田遺跡（7）、油口遺跡（8）で弥生時代の集落跡が検出されている。人跡東丹保遺跡では亞型埴輪を伴う古墳が検出されたことでも注目され



第2図 南アルプス市遺跡分布図

ている。

御動使川扇状地の扇端部に程近い豊小学校遺跡（★）は旧校舎建設の際に遺物が山上したこと弥生時代から古墳時代の遺跡であることは認識されていた。近年まで発掘調査を実施する機会はなかったが、隣接する十五所遺跡（9）かり部横断道建設計画の計画地内に位置しており、この周辺では初めての大規模な調査となった。豊小学校遺跡と同一集落であると想定して調査が行われたが、S字状口縁台付軒を伴う住居址とともに弥生時代後期の方形周溝墓群とみられる方形周溝状遺構が検出されている。やや扇尖部よりにあたる赤面C遺跡（10）では弥生時代終末期の住居址1軒が検出されている。扇端部寄りへ日を向けると古墳時代前期の遺構が検出された前原G遺跡（11）や、古墳時代前期ならびに平安時代の集落が検出された村前東A遺跡（12）、角力場第2遺跡（13）、寺部附第6・12遺跡（14・15）などがある。特に村前東A遺跡からは古墳時代前期の住居址としては100軒を超す県内最大規模の集落跡であることが明確している。これらからこの辺りに弥生時代末から古墳時代前期の遺構が濃密に分布していることが明らかになりつつあり、当該期が本市における人口増加、人口流入力強者にみとめられる西側であることを示している。また、この周辺一帯では弥生時代から古墳時代の土層の下部に間層を挟んで繩文時代馴熟から弥生時代中期の遺物包含層が検出される点も注目される。寺部附第6遺跡で古墳時代中期のU形の周溝をもつ低墳丘古墳が3基検出されている。市域における古墳は、從来市之瀬台地上の物見塚古墳（16）や六科丘古墳（17）などと知られており、扇状地上の古墳の存在により「該地域の古墳時代の動向を探る上で注目される。その後湧水川付近より滝沢川扇状地にかけた広範な範囲で古代から中世の集落が大規模且つ連続と認め続けていく様相が確認できる。」

#### 第4節 既往の調査

昭和34年、豊小学校の校舎は火災により焼失し、同作新校舎の建設が始まる。基礎工事の着工の際に「地表から約一メートル位下、（中略）底の裏側に木葉の押致がある土器の底部と、他に数箇の笠痕の土器片が出土した。」また、その土器が「前野町式土器に似ている」（豊村 1960）とあり、またその周辺の畠でも土器片を探集できるなど遺跡の存在が認識された。後に豊小学校遺跡として周知される。その後この遺跡周辺で本格的な発掘調査が行われるのは30年後のことであり、当地周辺での既往の発掘調査例を以下に挙げる（第3図）。

##### 【平成6～8年 十五所遺跡（一般国道52号線改築工事および中部横断自動車道建設に伴う調査】

調査面積：25,300 m<sup>2</sup>

検出遺構・遺物：弥生時代後期住居址11軒、同方形周溝状遺構18基、古墳時代前期住居址2軒、平安時代住居址2軒。全長550mを測る南北に細長い調査区であり、調査区北部、豊小学校遺跡に最も近い地点で弥生時代後期の住居址が、調査区南部、村前東A遺跡に近接する地点で平安時代住居址が検出されている。

##### 【平成12年 十五所遺跡（宅地造成に伴う試掘調査】

調査面積：68 m<sup>2</sup>

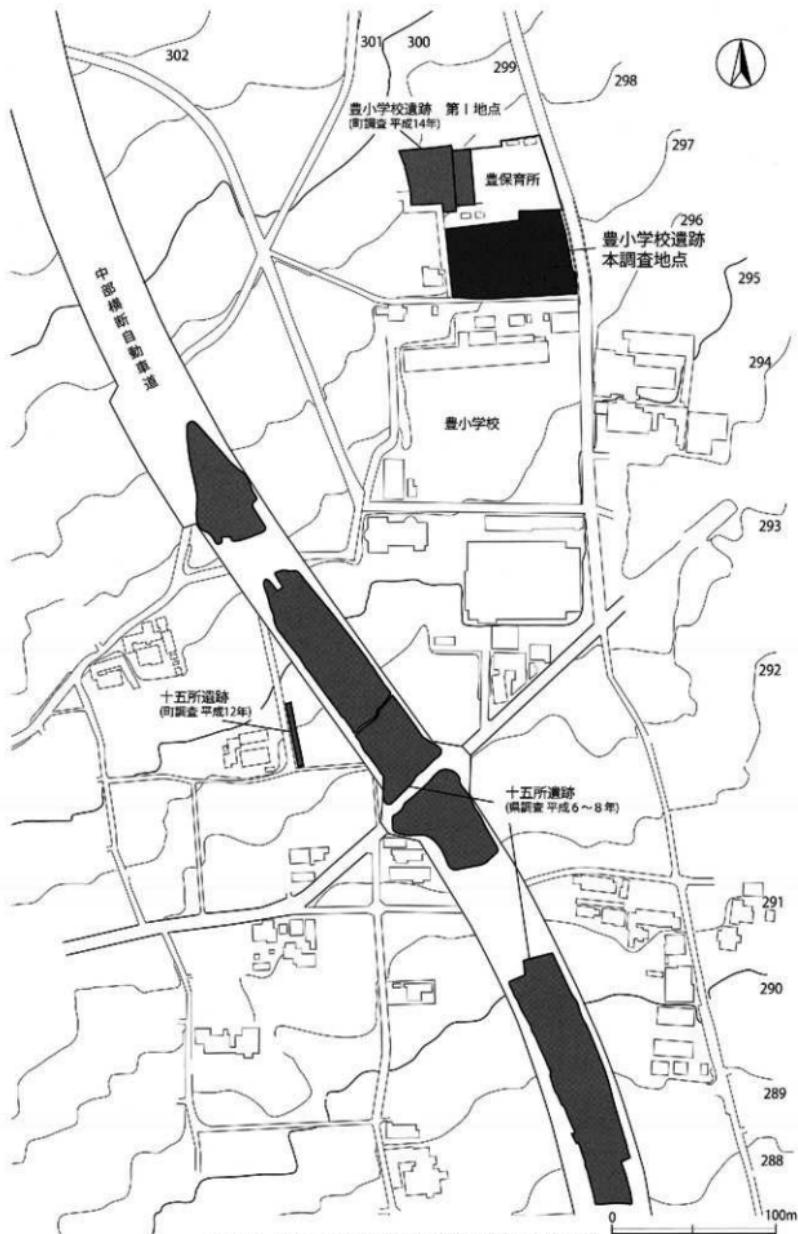
検出遺構・遺物：弥生時代後期同方形周溝状遺構1基、古墳時代前期住居址1軒。

##### 【平成14年 豊小学校遺跡（豊保育園建設に伴う調査】

調査面積：480 m<sup>2</sup>

検出遺構・遺物：弥生時代後期から古墳時代前期住居址6軒。

その他既存建物の基礎から住居址3軒も検出されている（基礎部分も含めると調査面積は約830 m<sup>2</sup>となる）。



第3図 遺跡周辺の地形及び調査地点の分布 (1/3000)

## 第三章 調査の方法

### 第1節 試掘調査と調査区の設定

既存建物の解体工事の進行に合わせ、新たな搅乱を発生させないため上層コンクリート等の撤去時点において基礎を地中に残したまま試掘調査を実施した。試掘溝は4箇所設定し、そのうち第2トレチ（T2）で土坑と土器片を検出した。遺構が存在し、且つ基礎間に搅乱を受けずに良好に土壤が依存していたため、本調査の実施へと至った（第4図）。

今回の建設計画では建物範囲のうち壁面の下のみに基礎があり、床に該当する範囲での掘削は行わないため、新たな基礎により掘削される範囲のみが調査対象範囲となる。新たな基礎の位置は北壁と西壁部分で既存建物よりも内側に設定されるのみで、既存建物の基礎とほぼ重複する。基礎を残した基礎周辺のみの調査区となることから、独立基礎を目安に便宜的に1区から5区と名称を付けて調査を実施した。

調査最終段階で検出された調査区北東端部の住居址が大きく東側の調査区へ伸びていることから、事業課と協議し、東側へ拡張することで合意し住居址のほぼ全容を確認することができた（第5図）。

### 第2節 調査方法と手順

重機による表土掘削は遺物を包含する層の直上で止めた。基礎を縁取るように入る搅乱は重機ならびに人力により除去し、搅乱の断面を観察しながら手作業により遺構確認面まで掘り下げた。遺構はベルトを設定し、遺物の出土状況を残しながら抹面まで掘り下げる。ベルトの土層観察、断面実測を行い、ベルトを除去した後出土状況の撮影を行う。遺物の3次元データはトータルステーションで記録しながらナンバーを振り取り上げた。出土状況の微細部は写真測定を併用しながらトータルステーション上で処理し、平面図に落とし込んでいる。遺物取り上げの後遺構を充填し、平面図、エレベーション図を作成した。

一括で取り上げる遺物は調査区ごととし、各調査区は基礎で囲まれているため、便宜的に独立基礎を境に各空間に枝番号を振った任意の調査区毎に取り上げた。グリッド方式は採用していない。

基準点はG P Sにより調査区際に3箇所設置した。

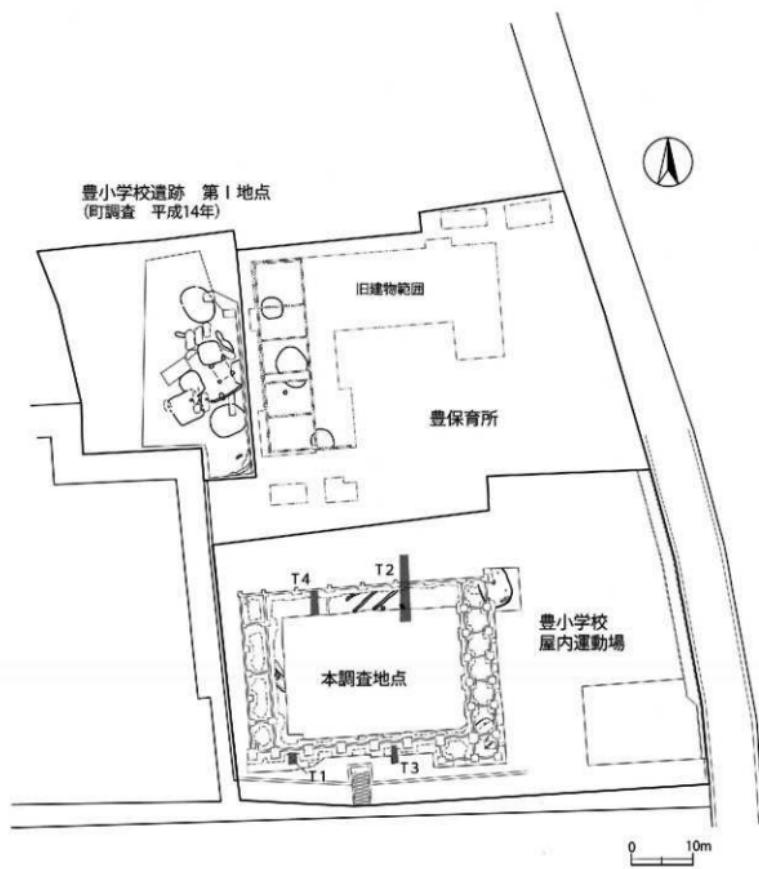
調査区内における土層堆積状況は扇状地特有の複雑な様相を呈しており、調査区全体で一括して示すことはできない。概ね碎石やその下の耕作土等表土を振り下げる遺物包含層である黒褐色シルト層が露出する。黒褐色シルト層は周辺地域で広く検出され、遺物が含まれることから鍵層としてとらえられている。黒褐色シルト層の下、遺構の検出面は暗黄褐色を呈したシルト層と砂礫層の両方がある。概ね調査区全体において暗黄褐色シルト層の下部で検出できる砂礫層が基質支持層といえ、それが露頭しているか否かの違いとみられる。御動使川によって形成された砂礫層のひとつとみて良い。シルト層の下部に砂礫を挟む場合もある。

また、1号住居址周辺には遺物包含層である黒褐色シルト層の下に暗黄褐色シルト層を1枚挟み、再び黒褐色シルト層の堆積がみられ1号住居址を検出することのできる暗黄褐色砂礫層へと至る。2号住居址と標高はほぼ同じであることなどから、間層を挟むことが時期差を示すとは言い難い。

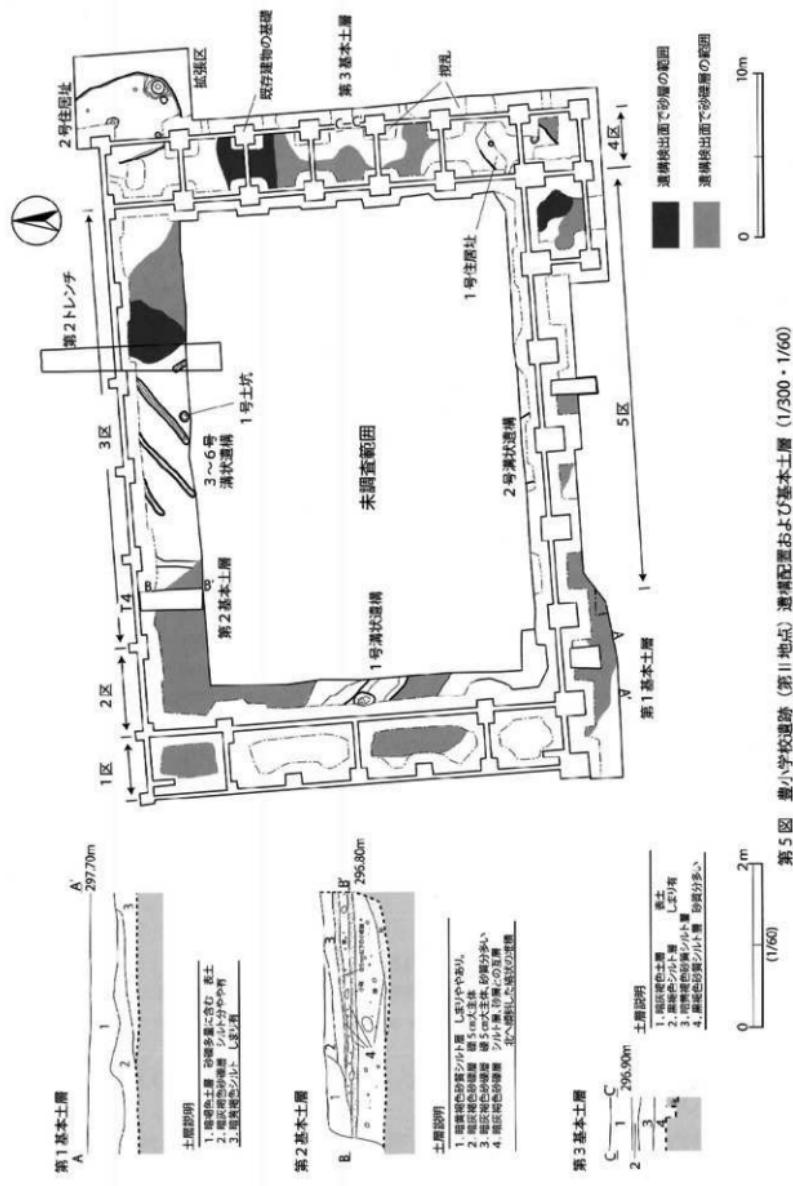
第1基本十層や第2基本土層でみとめられるように、堆積は南から北への堆積順序もしくは十層の傾斜が認められ、広大な御動使川扇状地を形成していく中で大局的には南東方向へ傾斜し砂礫を堆積していくものの、本遺跡は現在の地形の傾斜方向と違い、標高南から北へむけての堆積状況の上に成り立っていることがわかる。

第3図に示すとおり、本調査区の北側に浅い谷地形が認められることや近年示されている御動使川の流路変遷の想定などから、本調査区北側の流路の存在を示唆しているように思われる。

今回の調査は、新たに建設される建物により遺構が破壊される範囲や既存基礎の遺存状況などから制約が多く、遺跡を広く面的に捉えること困難な調査区であった。また、狭小な調査範囲のため今回検出した遺構確認面の下部にあるとされる縄文時代晚期から弥生時代中期の包含層を検出するには至らなかった。



第4図 豊小学校遺跡発掘調査地点（第Ⅰ地点・第Ⅱ地点）(1/800)



## 第IV章 検出された遺構と遺物

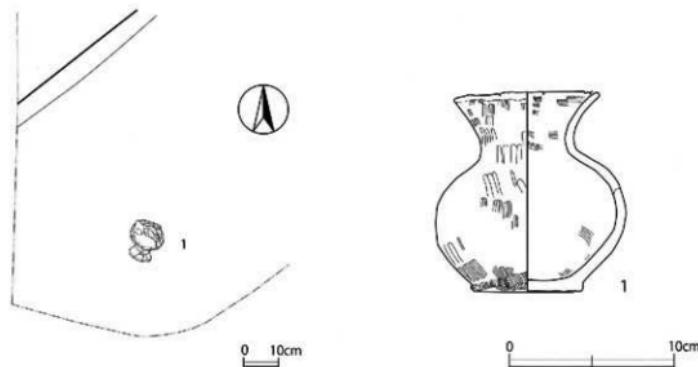
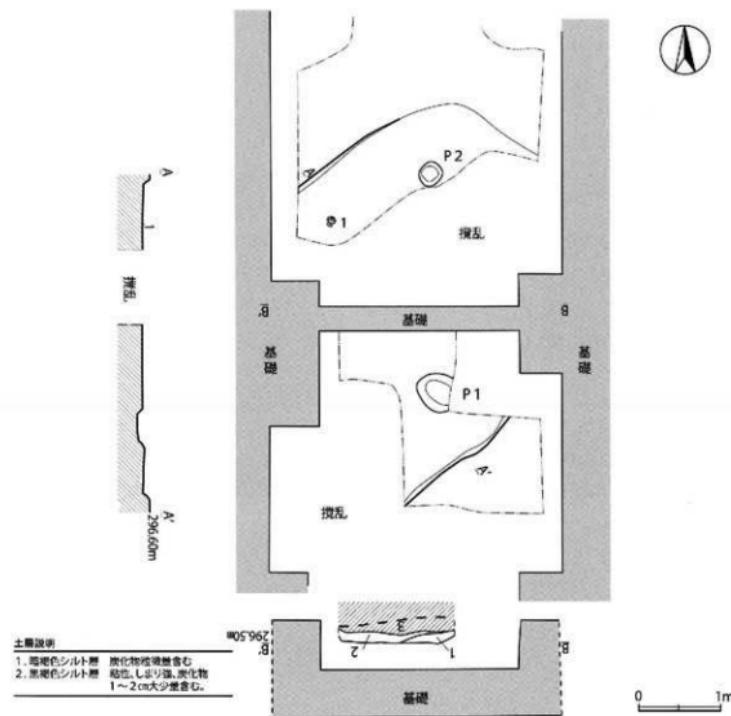
### 第1節 住居址

#### 1号住居址 (第6図、第1表、図版2)

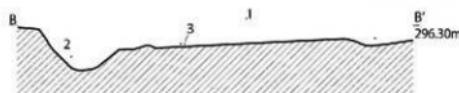
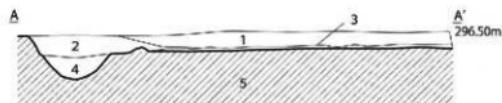
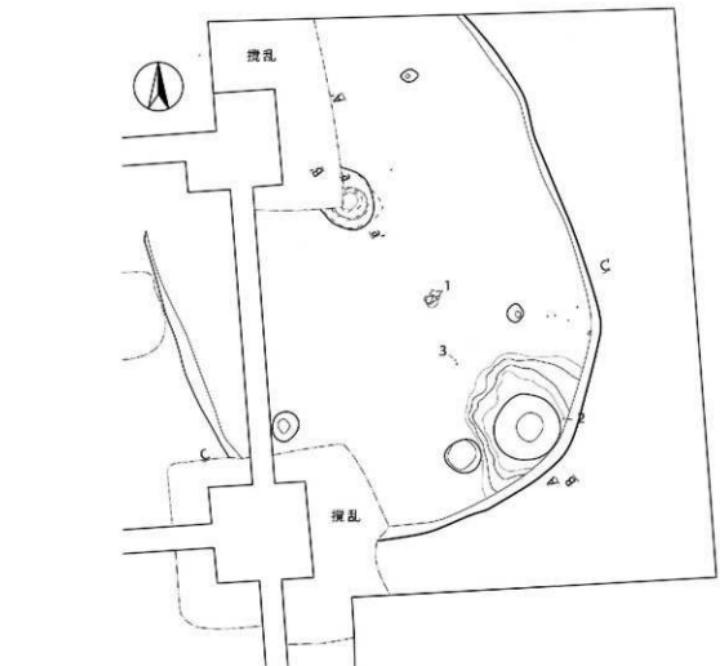
|      |  |
|------|--|
| 位 置  | 4区南端部の地中梁、基礎をまたがって検出されている。   |
| 遺存状況 | 基礎周辺の擾乱により大幅に破壊されている。住居址東側は調査区外へ伸び、西側は5区方向へ伸びている。基礎及び基礎周辺の搅乱内で収まっており立ち上がりを検出することはできなかった。壁高は約0.1mを測る箇所もあるが、全面的に削平を受け、立ち上がりを検出できずに確認面が床面となる範囲も少なくない。地中梁に隠れた梁の下部で0.2m程の覆土を検出している。 |
|      | また、本住居址周辺には遺物包含層とみられる黒褐色シルト層の下に暗黄褐色シルト層を1枚挟み、再び黒褐色シルト層の堆積がみられ、本遺構周辺での遺構断面である暗黄褐色砂質層が検出される。しかし、後に述べる2号住居址と概高はほぼ同じであり、その間層を挟むことが時期差を示すとは限らない。                                    |
| 平面形態 | 大部分が搅乱を受けていたため不明だが、床面とみられる範囲から隅丸長方形を呈するものと推測される。短軸とみられる軸方向では両取が遺存しており3.9mを測り、長軸は搅乱の位置から5.9m以下とみられる。  |
| 主 軸  | N-51°-E  |
| 覆 土  | 地山となる層は暗黄褐色砂質層で、覆土には暗褐色シルト層、床直上に黒褐色シルト層があり、炭化物を少量含んでいた。  |
| 床    | 貼床は検出されず、地山が床面となっている。  |
| 施設等  | 小穴は2基検出され、いずれも覆土は黒褐色シルトである。P1が柱穴であった場合住居の平面系は正方形に近い隅丸形ということになるが、規模や深度から疑問が残る。長径0.50m以上短径0.45m、深度0.08mを測る。P2は直径0.29~0.31mの不整円形を呈し、深度は0.09mを測る。柱穴とみられる。                          |
| 炉    | 検出されなかつた。  |
| 遺物   | 1は北側壁付近の床面直上で検出された壺で一部割れが生じているがほぼ完形である。小穴(P1)から土器細片が1点出土しているが器種等判別不可能であり図示し得なかつた。削平が著しいためその他出土遺物は非常に少ない。   |

#### 2号住居址 (第7・8図、第1表、図版3)

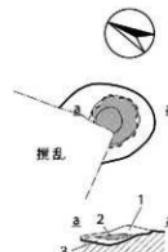
|      |   |
|------|---|
| 位 置  | 4区北端部より東、拡張区へまたがり検出されている。   |
| 遺存状況 | 基礎周辺の擾乱は大きかったものの、既存基礎の外側(東側)では擾乱もなく、遺構の遺存状況も良好といえる。住居址北側は調査区を拡張することができなかつたため一部検出できていない。 |
|      | 壁高は約0.2mを測る。地中梁に隠れた下部は搅乱を受けておらず床面は遺存している。   |
| 平面形態 | 平面形は小判形に近い隅丸長方形を呈している。長軸6.6m以上(推定7.1m)、短軸5.0mを測る。                                       |
| 主 軸  | N-21°-W   |
| 覆 土  | 地山となる層は暗黄褐色砂質シルト層で、覆土には黒褐色シルト層、床直上では暗黄褐色砂質シルト塊をまだらに含んでいる。                               |
| 床    | 貼床とみられる炭化物は、柱穴とみられる小穴と入り口施設とみられる小穴とで囲まれた範囲  |



第6図 1号住居址 (1/60・1/15・1/3)



0 1m



0 50cm

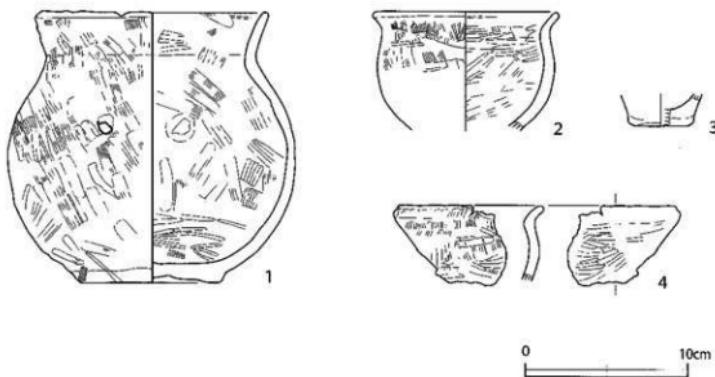
#### 土層説明

1. 黒褐色シルト層 遺物あり
2. 黒褐色土層 淡青褐色シルト質少量含む
3. 黒褐色砂質シルト層 淡化物粒含む
4. 黑褐色の黄シルト層
5. 地角褐色砂質シルト層

#### 土層説明

1. 黑褐色シルト層 棕色粒少無、炭化物少無含む
2. 暗棕褐色土層 上面は淡化し火炎
3. 暗褐色砂質シルト層 細赤褐色土粒多量に含む

第7図 2号住居址(1) (1/60・1/30)



第8図 2号住居址 (2) (1/ 3)

著に、その他の範囲においてもほぼ全面で検出された。

**施設等** 杜穴とみられる小穴は3基検出され、住間3.1～3.2mの正方形に配置された4本柱とみられる。残りの1基は基礎の搅乱内に配置されていたとみられる。いずれも覆土は黒褐色砂質シルトである。

また、入り口施設に付随するものとみられる小穴も検出され、長径0.45m、短径0.42mの不整円形を呈し、深度は0.14mを測る。

その小穴の東、入り口とみられる住居址南側から奥を向いて右手壁際に、周堤帯を伴う貯蔵穴とされる土坑1基が検出されている。長径0.82m、短径0.79m、深度0.30mを測る。

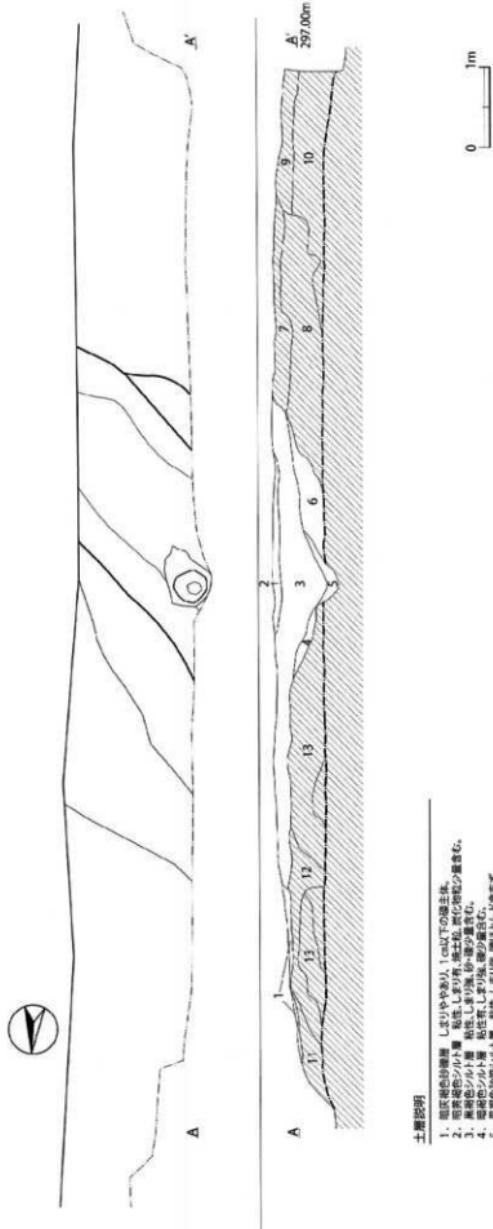
**炉** 住居址のほぼ中央、やや奥壁寄りで検出された。一部に攪乱を受けている。床面を浅く掘りくぼめた地炉戸で橢円形を呈する。

**遺物** 検出された遺物は十器片のみで、住居址の南東部で比較的集中して検出された。1は床から覆土上部の遺構確認面の直下で検出された。胴部に穿孔がある。2は貯蔵穴とみられる土坑の上端附近で住居址壁よりから出土している。3は床直上で検出されたミニチュア土器の底部破片である。その他検出量は総数約70点と少ないものの、ハケ調整の施された台付壺とみられる上器片が占める割合が高い。

## 第2節 土坑・溝状遺構・遺物集中区

### 1号土坑(第11図、図版4)

3区の中央、5号溝状遺構そばで検出された。1号土坑は黒褐色シルト層の最下層、黄褐色砂質層がまばらに見え始める段階で確認されており、近接する3号～6号溝状遺構はその段階の層位では確認できないため、それより後に掘り込まれたことがわかる。直径0.64m、短径0.52mの橢円形を呈し、断面はゆるやかな立ち上がりの錐底状を呈する。深度は約0.16m。覆土は黒褐色シルトで炭化物粒を少量含んでいる。

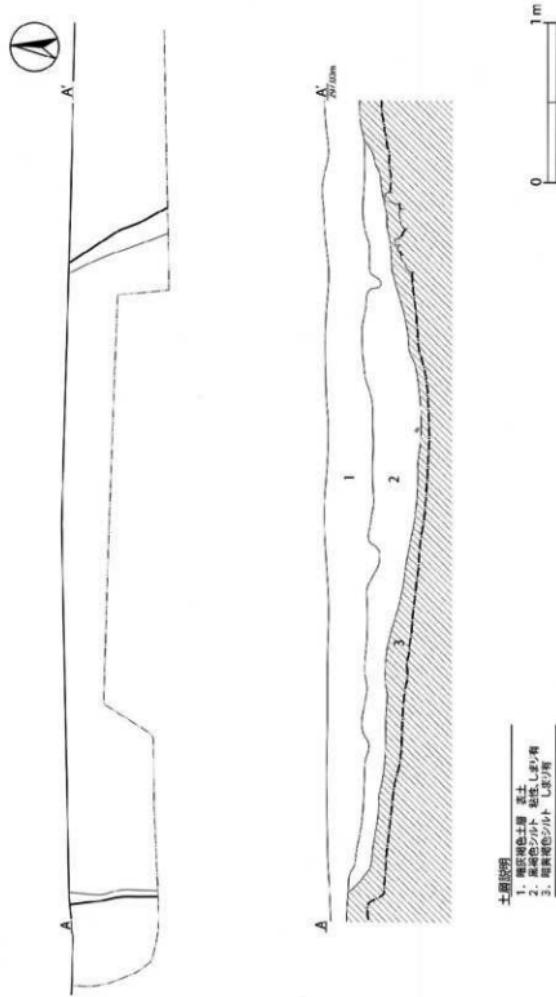


土壤説明

1. 頂点褐色砂質土層 じょうてきしやくさじょ 1 cm<sup>2</sup>の過剰土。
2. 黄褐色砂シルト層 こうじゆしきさじると 乾性、乾燥、少鹽分。
3. 黄褐色シルト層 こうじゆしきじると 乾性、少鹽分。
4. 黄褐色シルト層 こうじゆしきじると 乾性、少鹽分。
5. 黄褐色砂質シルト層 こうじゆしきさじじると 乾性、少鹽分。
6. 黄褐色シルト層 こうじゆしきじると 乾性、少鹽分。
7. 黄褐色シルト層 こうじゆしきじると じりきりひびいて、根の多い多量に含む。
8. 黄褐色砂質シルト層 こうじゆしきさじじると 乾性、少鹽分。
9. 黄褐色砂質シルト層 こうじゆしきさじじると 乾性、少鹽分。
10. 黄褐色砂質シルト層 こうじゆしきさじじると 乾性、少鹽分。
11. 海藻肥沃沙質土層 かいざいひよくさじょ 10~15cmの大半に含む。
12. 海藻肥沃沙質土層 かいざいひよくさじょ 水底堆積の特徴。
13. 海藻肥沃沙質土層 かいざいひよくさじょ 10~15cmの大半に含む。

第9図 1号溝状遺構 (1/60)

第10図 2号潮状連続 (1/30)



### 1号溝状遺構（第9図）

2区で検出された。調査範囲が幅1.5mと細長く、直角に遺構を確認することができなかったため、遺構としてとらえるか判断が難しいところである。溝状の落ち込みに対して直角に細長いトレンチを入れる格好での調査区であり、溝の方向が不明である。溝の続きは1区では検出できず、その間の擾乱内で収束するのか、また1区の基礎に開まれた範囲内全てが溝状遺構内に収まり遺構確認段階で把握できなかった可能性も否定できない。溝状遺構の基盤十堆が示すとおり、大きく南から北方向への堆積方向が読み取れ、シルト質・砂質とが交互にみられることなどから堆積過程における落ち込みあるいは自然流路の可能性もある。比較的平坦な底面をもつが、一部小穴状の窪みをもつ。北側の立ち上がりは中端より緩やかに立ち上がり、上端は砂礫層の堆積により確認しえない。

遺物は台付甕とみられるハケメ調整の土器片がわずかに検出されたが図示し得るものはなかった。

### 2号溝状遺構（第10図、図版5）

5区で検出された。1号溝状遺構同様細長い調査区であり、検出できた幅は0.5mと狭い。しかし、遺構の地山は安定した暗黄褐色シルト層であり、人为的な掘り込みとみて良い。その形状から土坑の可能性はあるが、検出されたのは二方向の立ち上がりのみであり、ここでは溝状遺構として扱った。幅4.6m、深さ0.36mを測る。

遺物は台付甕とみられるハケメ調整の非常に細かい土器細片が検出されている。図示し得るものはないが磨耗が著しい印象はない。

### 3号溝状遺構（第11図、図版4）

3区から検出され、3号から6号溝状遺構は近接する。また、3号から5号溝状遺構は平行しており、いずれも溝幅0.25～0.5mで形状は似ている。3号から6号溝状遺構は同じく近接する1号土坑が確認された層位では確認できず、完全に暗黄褐色砂質シルト層もしくは暗黄褐色砂礫層が露出して初めて検出される。覆土は主に暗褐色シルト。3号溝状遺構は南北方向へ伸び、深度を減じながら調査区内で収束する。距離は約2.5m、幅0.30～0.39m、深さ0.15mを測る。

遺物は検出されなかった。

### 4号溝状遺構（第11図、図版4）

3区から検出され3号、5号溝状遺構と並行し、調査区内で収束する。北側ほど深度は増す。覆土は暗褐色シルト。距離は約5.2m、幅0.26～0.40m、深さ0.15mを測る。

遺物は検出されなかった。

### 5号溝状遺構（第11図、第1表、図版4）

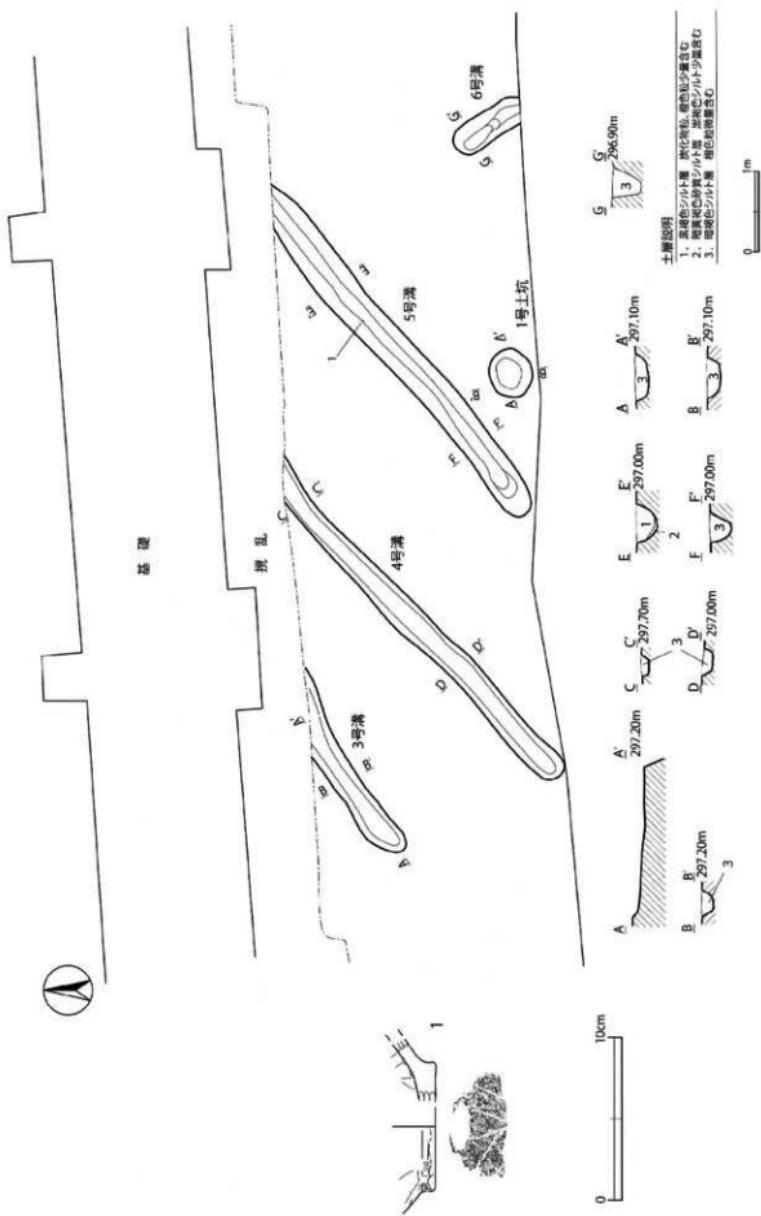
3区から検出され3号、4号溝状遺構と並行し、調査区内で収束する。覆土は暗褐色シルト。距離は約5.1m、幅0.40～0.50m、深さ0.24mを測る。

遺物は覆土内から木葉痕のある壺の底部破片（1）が出土しているほか、図示し得なかつたが甕の破片が3点出土している。

### 6号溝状遺構（第11図、図版4）

3区から検出され3号～5号溝状遺構とほぼ直交する方向で伸び調査区内で収束する。覆土は暗褐色シルト。距離は約1.1m、幅0.36m、深さ0.35mを測る。

遺物は図示し得るものはなかったが、甕とみられる土器片が5点出土している。



### 遺物集中区（第12～14図、第1表、図版5）

3区東側で検出された。自然の落ち込み地形に伴い堆積したものとも考えられるが、本遺跡での遺物出土状況としては特徴的なため、遺物集中区として取り上げる。

地山は暗黄褐色砂質シルトもしくは同シルトに礫が多量に含まれたものや砂礫層からなり、東へ向けて傾斜している。覆土は黒褐色シルトで遺物・礫を多く含んでおり、図示した遺物も全て黒褐色シルト層上からの検出である。

1はおよそ3分の2ほど遺存しているが、出土状況は多くが細片で3m程の範囲に広がりを確認できる。2や13は刻み目口縁をもつ台付甕の口縁部ないし胴部上半の破片で、器表面の遺存状況は良好である。反対に4、6、9、12、15、16、17などは器表面の磨耗が著しい。図示し得たものの他には台付甕とみられるハケメ調整の土器片や壺の破片が多く検出されているが、高坏の破片もわずかながら検出されている。

### 第3節 遺構外出土遺物（第15・16図、第1表）

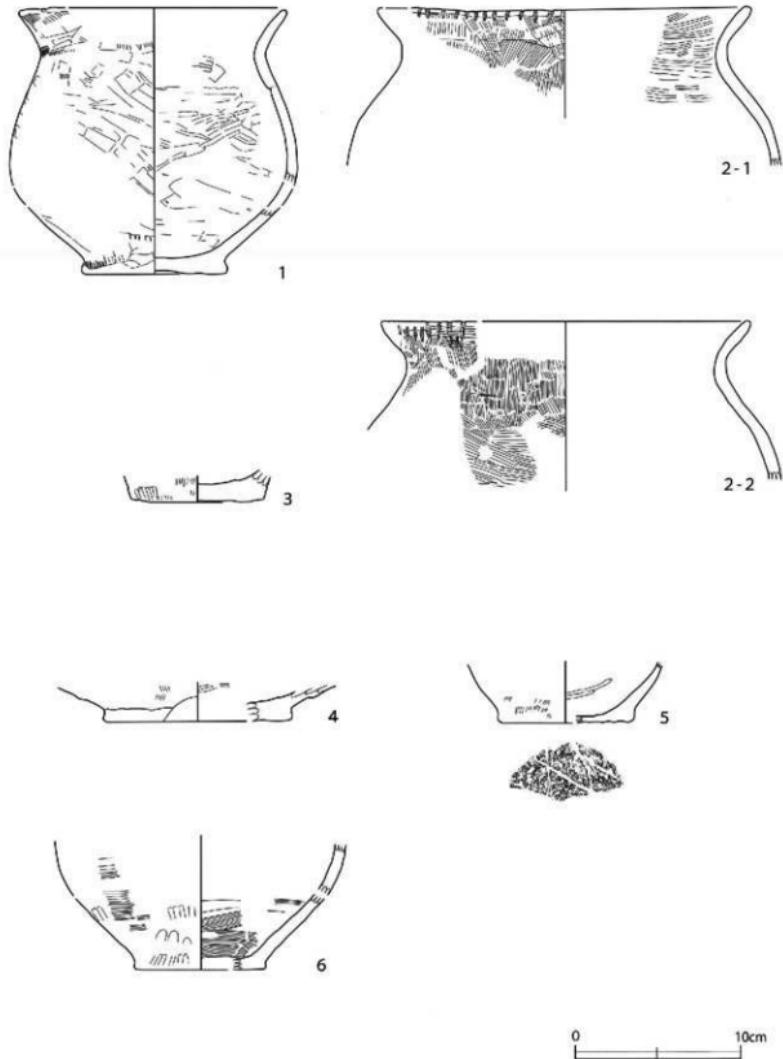
1区の1から5は1区の中でも供伴ともいえる状況で検出された。出土状況としては遺構ではなく、地形の変換点あるいは道路形成過程でのくぼみ状の自然地形へたまつたものとみられる。いずれも器表面の磨耗が著しい。2はS字形口縁台付甕の口縁部破片で屈曲は弱く先端が尖る。刺突は施されていない。5は2段1組の穿孔を3単位有する高坏の脚部で、端部がやや内湾な空開気を残すがほぼ円錐状を成す。

3区で検出された遺物は遺物集中区よりも西側の3号～6号溝状遺構の周辺より出土している。比較的遺存状態が良好で器表面の磨耗の度合いは算若ではない。2はS字形口縁台付甕の口縁部破片で屈曲が強く端部は外反せず丸みをもつ。

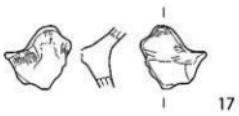
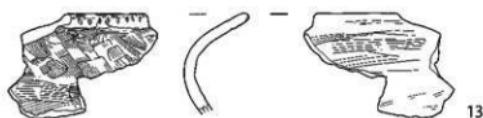
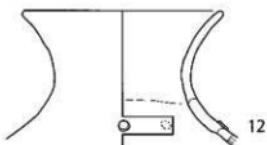
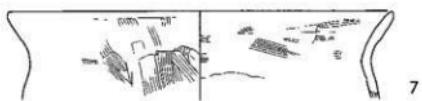
遺構外出土遺物のうち図示したものの他には台付甕、壺、高坏とあるが、主に台付甕とみられる土器片が占める割合が高い。4区でのみ比較的高坏の破片が多く検出されており、その中には稜をもつ高坏の坏部破片も含まれていた。全体的に遺物表面の遺存状況は悪かった。

第12図 遺物集中区(1) (1/40)





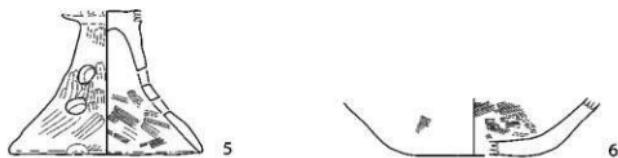
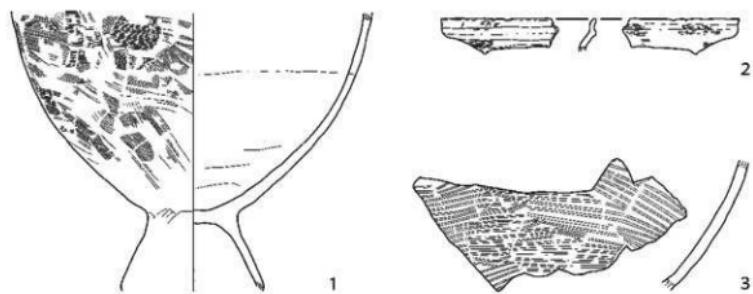
第13図 遺物集中区（2）(1/3)



0 10cm

第14図 遺物集中区(3)(1/3)

1区



2区

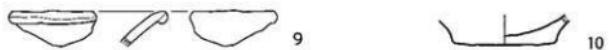


第15図 遺構外出土遺物（1区・2区）(1/3)

3区



4区



第16図 遺構外出土遺物（3区・4区）(1/3)

第1表 豊小学校遺跡出土土器類縦表

| 番号 | 断面・位置 | 形状 | 法面 (cm) | 「」面  | 側面               | 底面                | 測量         | 断土  | 焼成 | 色調  | 質地  |
|----|-------|----|---------|------|------------------|-------------------|------------|-----|----|-----|-----|
| 6  | 1 1号  | 豆  | 8.6     | 12.4 | ヨリ少<br>シヨリ少<br>シ | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 外赤  | 外赤  |
| 8  | 1 2号  | 豆  | 11.3    | 8.6  | 16.0<br>(11.4)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 明褐色 | 明褐色 |
| 8  | 2 2号  | 豆  | 8.3     | —    | —                | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 8  | 3 2号  | 豆  | 8.3     | —    | —                | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 11 | 4 2号  | 豆  | 8.4     | —    | —                | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 13 | 1 3号  | 豆  | 11.0    | 8.0  | 16.2<br>(16.0)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 13 | 2 3号  | 豆  | 13.2    | 8.4  | 16.2<br>(22.6)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 13 | 3 3号  | 豆  | 13.3    | 8.0  | 16.0<br>(11.4)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 13 | 4 3号  | 豆  | 13.5    | 8.4  | 16.0<br>(8.0)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 13 | 5 3号  | 豆  | 13.6    | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 7 3号  | 豆  | 14.7    | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 8 3号  | 豆  | 14.8    | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 9 3号  | 豆  | 14.9    | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 10 3号 | 豆  | 14.10   | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 11 3号 | 豆  | 14.11   | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 12 3号 | 豆  | 14.12   | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 13 3号 | 豆  | 14.13   | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 14 3号 | 豆  | 14.14   | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 15 3号 | 豆  | 14.15   | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 16 3号 | 豆  | 14.16   | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 14 | 17 3号 | 豆  | 14.17   | 8.4  | 16.0<br>(23.2)   | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 15 | 1 4号  | 豆  | 15.1    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 15 | 2 4号  | 豆  | 15.2    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 15 | 3 4号  | 豆  | 15.3    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 15 | 4 4号  | 豆  | 15.4    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 15 | 5 4号  | 豆  | 15.5    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 15 | 6 4号  | 豆  | 15.6    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 15 | 7 4号  | 豆  | 15.7    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 1 5号  | 豆  | 16.1    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 2 5号  | 豆  | 16.2    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 3 5号  | 豆  | 16.3    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 4 5号  | 豆  | 16.4    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 5 5号  | 豆  | 16.5    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 6 5号  | 豆  | 16.6    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 7 5号  | 豆  | 16.7    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 8 5号  | 豆  | 16.8    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 9 5号  | 豆  | 16.9    | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 10 5号 | 豆  | 16.10   | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |
| 16 | 11 5号 | 豆  | 16.11   | 9.4  | 16.0<br>(8.4)    | タテハナ<br>ミガタ<br>ハナ | 中央部<br>小字記 | やや赤 | 少  | 褐色  | 褐色  |

## 第V章 総括

### 第1節 調査成果の概要

本調査で検出された主な遺構は住居址2軒、土坑1基、溝状遺構6条であり、出土遺物からこれまでの調査で指摘されてきたとおり、弥生時代後期の最終段階から古墳時代初頭の集落がさらに広がりをもつことが判明した。遺物の出土状況からは弥生時代と古墳時代を明確に分ける分布状況は示されなかったが、住居址出土の遺物が示すとおり本地点では弥生時代後期の、あるいは在来化した系統的印象がより強いものとみられる。近隣の調査で示されている縄文時代晚期から弥生時代中期の遺物や平安時代の遺物は、時期が判別できるものの中には含まれていなかった。

今回の調査は、新たに建設される建物により遺構が破壊される範囲や既存基礎の遺存状況などから制約が多く、遺跡を広く面的に捉えることに困難な調査区であった。また、狹小な範囲を指揮したことから今回検出した遺構確認面の下限にあるとされる縄文時代晚期から弥生時代中期の包含層を検出するには至らなかった。

当遺跡周辺地域で確認される黒褐色シルト層は、周辺同様遺物包含層となり遺構確認の際の鍵層となる。1号土坑のように本遺跡でも一部に黒褐色シルト層内で遺構が確認できる場合があり、これもまた周辺遺跡と同様である。また、1号住居址周辺には遺物包含層である黒褐色シルト層の下に暗黃褐色シルト層を1枚挟み、再び黒褐色シルト層の堆積がみられ1号住居址を確認することのできる暗黃褐色の標界へと至る。しかし、2号住居址と標高はほぼ同じであることなどから、間層を挟むことか時期差を示すとは言い難く局地的特徴であるが堆積状況は変化に富んでいる。

豊小学校遺跡の遺構の検出面は砂礫層の上に堆積したシルト層であったり砂礫が露出する面であるが、この砂礫層は調査区のほぼ全域で検出されることから御動使川扁状地を形成する砂礫層のひとつとみられる。基本土層で示した各土層断面からわかるとおり、広大な御動使川扁状地を形成していく中で大筋的には南東方向へ傾斜し砂礫を堆積していくが、本遺跡は概ね南から北へむけての堆積状況の上に成り立っていることがわかる。また、豊小学校遺跡第1地点の試掘調査でも示されている通り現地表面から1.6mまで砂礫層が続き、水成堆積の状況が確認されているなど、流路変遷の過程の中で本遺跡が巣かれていることを示している。このことは近年示されている御動使川の流路変遷との関係がある意味裏付ける結果となっており、第2節で触れたい。

今回、第I地点に近い西側よりも東へ離れた地点で出土が検出されたことで、等高線に直行する南東向山へ集落の広がりを見ることができた。豊小学校東側はやや傾斜を強めて標高を減じるために、この間にいわゆる微高地に上に集落が取まるものとみられる。また、第I地点の調査では弥生時代後期の遺物とともにむしろ古墳時代初頭の山上遺物が多く検出されており、住居址も同様の傾向を示していた。本第II地点の南西側では、豊小学校校舎建設時に弥生時代後期の土器が検出されている点などから2時期での遺構の占地状況に差異はみとめにくいうものとみられる。より広く今後の調査成果を期待するところであり、また「五所跡などとの中で集落の性格を捉える必要がある。

### 第2節 豊小学校遺跡をとりまく集落の様相(第17図)

第II章でも示したとおり、当遺跡周辺地域では近年になって発掘調査の実施例が増加しており、御動使川扁状地扁端部周辺での集落の状況が判明しつつある。

その契機となったのは、南アルプス市域の御動使川扁状地を始め御動使川扁状地などで形成された複合扁状地を縦断するように計画された中幹横断自動車道の発掘調査、試掘調査といえ、遺跡の所在・内蔵が明らかになっただけでなく、周辺地域における自然環境の変化、御動使川の流路変遷についても示されることとなつた。

まさに南アルプス山の扁状地に南北にメスを入れた形となった。逆の調査により、流路を示す砂礫層の堆積状

れなどから、現在の御動使川以前の流路の変遷ならびに本流としていたであろう時期が推定されている。

平安時代以前の御動使川は、現在よりもさらに南側を幾筋にも流路を変えながら流下していたことがわかり、豊小学校遺跡や十五所遺跡は、上今井・ドリトの辺りを流下する流路と、十五所・十日市場の辺りを流下する流路との間に挟まれた地域とみられている。特に豊小学校遺跡はすぐ北側を上今井・下今井の流路が流下していたとされ、その時期を縦文時代後期から強化時代中期にかけての時期とみている。つまり当該地域特有の一軒の包含間に堆積する砂礫層の存在から、この後弥生時代後期に再び集落が営まれるまでの間に何らかのイベントがあったことを示唆している。

今回の調査で、豊小学校遺跡の営まれた基質・支柱構とみられる砂礫層と互層関係を成すシルト層が北方向への堆積状況を示しており、広大な御動使川扇状地を形成していく中で大局的には南東方向へ傾斜し砂礫を堆積していくが、局地的にはそれと違った様相を示した珊瑚山が、まさに、豊小学校遺跡北側を流下する流路の存在といえる。ただし今回の調査では、本地点で検出された砂礫層が、北側の流路との関係の中で当地が必定した段階で集落として営まれていたことを示すのみで、流路変遷を考察する上で示されている弥生時代中期以降後期までの間に起きたイベントを示すものではない。

これら旧治水間に挟まれて知られる遺跡には主に、弥生時代後期から古墳時代初頭の集落を示すものが多い。S字彫のA類・B類をはじめ伊勢湾系土器を多量に有することで注目された村前東A遺跡では、該期のものとみられる隅丸方形を呈した住居址を中心検出されている。また平安時代の作居址も多く検出されており、この遺跡での中心的な集落としてはこの「町堀」といえる。しかし、調査区北端他の住居址とは離れた位置から1軒小判形の作居址が検出されており、弥生時代後期後半葉の時期が与えられている。この作居址はむしろ村前東A遺跡に北接する十五所遺跡の集落に該するものとみられている。

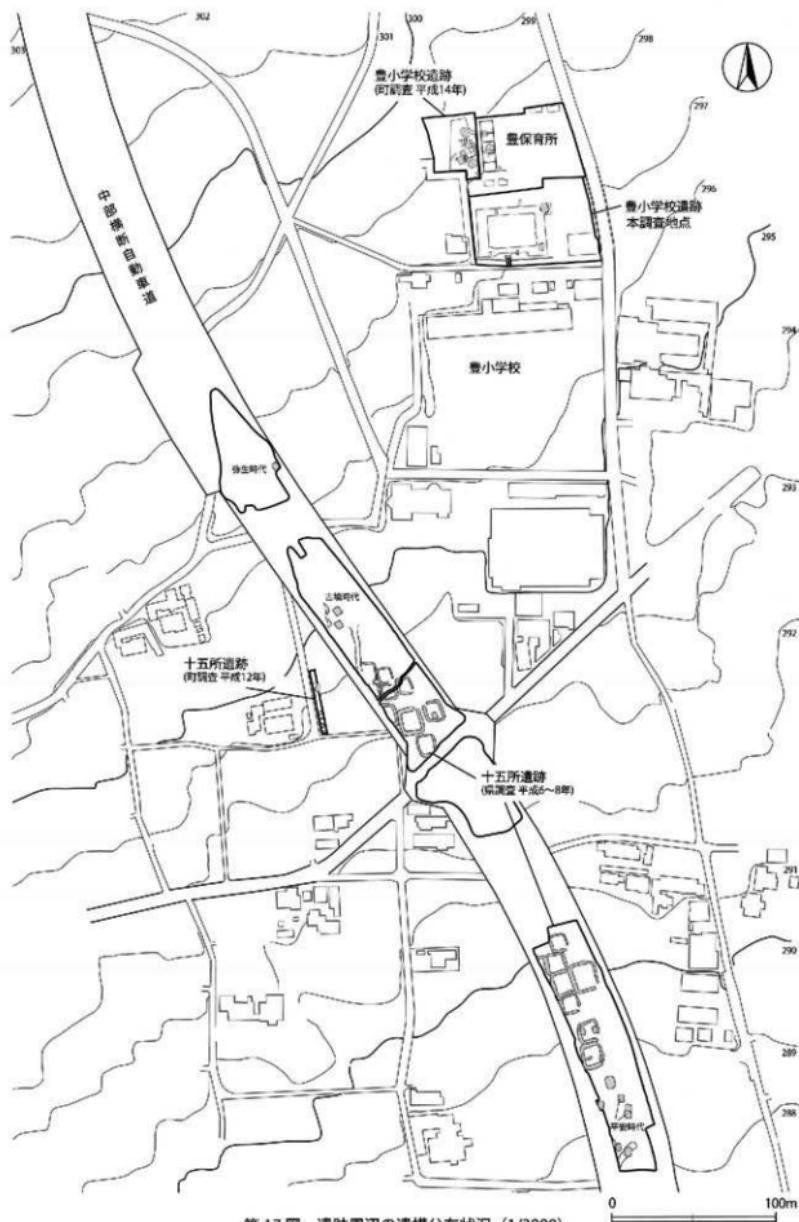
十五所遺跡もまた調査区内で上に3つの時期で遺構の占地状況に特徴を見ることができる。弥生時代後期の住居址は方形周溝墓とみられる方形周溝状遺構群と同時に存在もしくは廃絶後に方形周溝状遺構群が築かれるなどの様相を示しており調査区中央付近に集中する。方形周溝状遺構群の北側には隅丸方形の平面形を呈する古墳時代初頭の住居址が2軒検出され、さらに北側の豊小学校遺跡に最も近い地点で小判形の平面形を呈した弥生時代後期の住居址が1軒検出されている。方形周溝状遺構群の南側には平安時代の作居址が2軒検出されており、これはむしろ南接する村前東A遺跡の平安時代集落を構成するものとみられる。

豊小学校遺跡第1地区では密集して9軒の作居址が検出されているが、弥生時代後期と古墳時代初頭の住居址が混合しており占地状況に差異はみとめられない。いずれの遺跡においても住居址の平面形態が小判形は弥生時代後期を、隅丸形は古墳時代初頭を示す傾向は明確でありこれまで示されている通りといえる。

以上の点から豊小学校遺跡の特徴としては弥生時代後期から古墳時代初頭へと継続的な集落の営みが認められる点であり、十五所遺跡の方形周溝状遺構群以上の住居址をその集落の範囲としてとらえることができると推測でき、区別するならば、十五所遺跡の集落はより方形周溝状遺構群を中心とする弥生時代後期に集中させることができると考えられる。また、方形周溝状遺構群からの検出件数が多くの点も興味を引く。ここでは詳細な検討は行わないが、今後の調査例に期待するとともに、豊小学校遺跡周辺の集落を広く概観する中でより「地域の集落変遷の性格を見出すことができるものと考える。

## 参考文献

- |              |                                    |           |   |
|--------------|------------------------------------|-----------|---|
| 静岡県立考古学公会    | 2000 「古」と「遺跡」 横河文化出版会社6月18         | 山梨県       | 1989 「山梨歴史 舞台幕2 古跡・古代2 古代」 (編集・監修)                |
| 静岡県立考古学公会    | 2001 「日本の歴文化遺跡と古跡研究」               | 山梨県立考古学公会 | 2001 「古」遺跡3・5。山梨県立歴史文化センター調査報告第23集                |
| 静岡県立考古学公会    | 静岡県立考古学公会6月25                      | 山梨県立考古学公会 | 2002 「山梨の古跡」 山梨県立歴史文化センター調査報告第37集                 |
| アルプス市町村委員会公会 | 2004 「佐久市第6西山 古アルプス山地遺跡の発見と活用」 佐久市 | 山梨県立考古学公会 | 1999 「十五所遺跡 第1回 基盤調査」 十五所遺跡 山梨県立歴史文化センター調査報告第158集 |
| アルプス市町村委員会公会 | 2005 「小山田遺跡 古アルプス山地遺跡の発見と活用」 関東4集  | 石井        | 1990 「遺跡」   |
| アルプス市町村委員会公会 | 2008 「平成18年秋場遺跡出土物の発掘報告書」          | 石井 研究会委員会 | 1991 「隅方堀第2遺跡」 草野町歴史文化保存協議会第1集                    |
|              | 古アルプス市町村委員会公会 第15集                 | 越後の歴史と文化  | 1992 「隅方堀第3・4遺跡」 草野町歴史文化保存協議会第2集                  |



第17図 遺跡周辺の遺構分布状況 (1/3000)

# 写真図版



調査区周辺の景観（北東より）



調査区（北より）

—調査区全景—



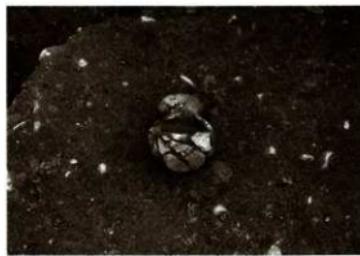
1号住居址全景（西より）



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



1号住居址全景（北東より）



2号住居址全景（南東より）



2号住居址全景（北西より）



土器出土状況



炉址



3号～6号溝状遺構・1号土坑（南西より）



5号溝状遺構出土遺物（東より）



3号～6号溝状遺構・1号土坑（北より）



3号・4号・5号溝状遺構（北西より）



1号土坑（南より）

—溝状遺構・土坑—



遺物集中区遺物出土状況（北東より）



遺物集中区遺物出土状況（北東より）



2号溝状遺構（南西より）



第2基本土層断面

—溝状遺構・遺物集中区・基本土層—

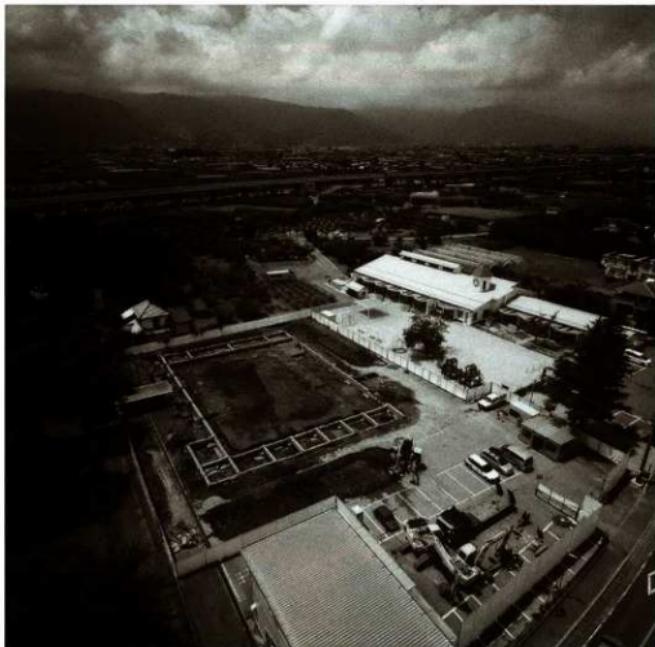
図版 6



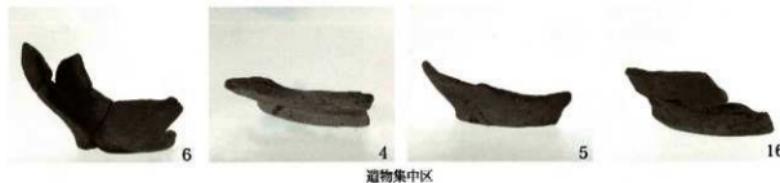
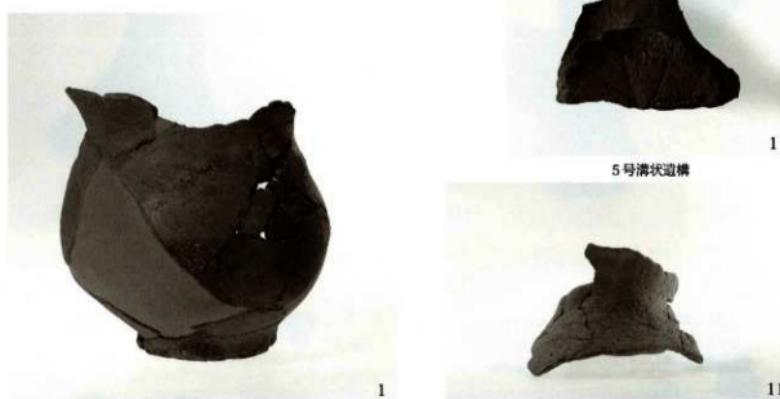
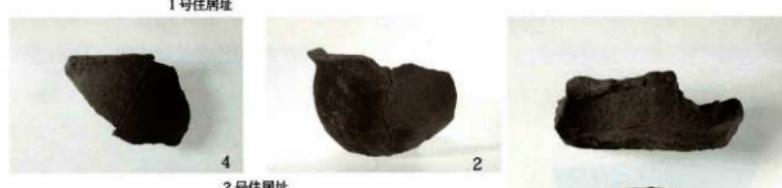
農学校 6 年生休憩学習風景



作業風景



調査区周辺の景観（南東より）

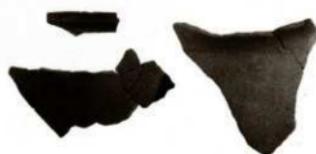


—住居址・溝状遺構・遺物集中区出土土器—

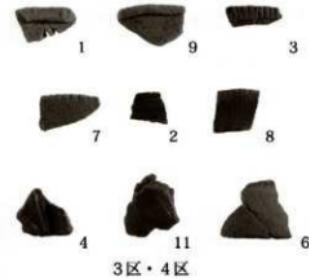
図版 8



遺物集中区



遺物集中区



3区・4区

-遺物集中区・遺構外出土土器-

|        |  |
|--------|--|
| ふりがな   | ゆたかしょうがっこういせき                              |
| 書名     | 豊小学校遺跡（第Ⅱ地点）                               |
| 副書名    | 豊小学校屋内運動場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書                 |
| シリーズ名  | 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書                           |
| シリーズ番号 | 第17集                                       |
| 編著者名   | 保阪太一                                       |
| 編著機関   | 南アルプス市教育委員会                                |
| 所在地    | 〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212 TEL055-282-7269 |
| 発行年月日  | 2008年3月25日                                 |

| ふりがな<br>所収遺跡            | ふりがな<br>所在地 | コード   |         | 北緯          | 東經           | 標高<br>(m) | 調査期間                | 調査面積<br>(m <sup>2</sup> ) | 調査原因          |
|-------------------------|-------------|-------|---------|-------------|--------------|-----------|---------------------|---------------------------|---------------|
|                         |             | 市町村   | 遺跡番号    | (世界測地系)     | (世界測地系)      |           |                     |                           |               |
| ゆたかしょうがっこういせき<br>豊小学校遺跡 | 吉田 787      | 19208 | KG - 20 | 35° 37' 23" | 138° 28' 42" | 297       | 2006年6月5日<br>～7月27日 | 713                       | 豊小学校<br>屋内運動場 |

| 所収遺跡名  | 種別  | 主な時代                  | 主な遺構           | 主な遺物       | 特記事項                         |
|--------|-----|-----------------------|----------------|------------|------------------------------|
| 豊小学校遺跡 | 散布地 | 弥生時代後期<br>～<br>古墳時代初頭 | 住居址 2軒<br>溝 6条 | 弥生土器、古式土師器 | 扇状地上の弥生時代後期末<br>から古墳出現期の集落遺跡 |

---

---

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第17集

豊小学校遺跡（第II地点）

豊小学校屋内運動場跡に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

発行日 2008年3月25日

発行者 南アルプス市教育委員会

〒 400-0492

山梨県南アルプス市船沢 1212

TEL055-282-7269

印刷所 鬼灯省略株式会社

〒 381-0012

長野県長野市柳原 2133-5

TEL 026-244-0235

---

---

